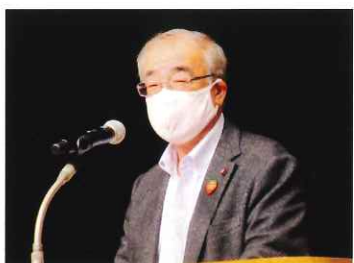




鈴木貢文化協会会長



佐藤信鹿沼市長



大島久幸市議会議長



松井正一県議会議員



木村剛考商工会議所会頭



ロビーコンサート

第44回鹿沼市民文化祭開幕式を、9月24日(土)鹿沼市民文化センター小ホールで開催しました。昨年の開幕式及び「藤石波矢トークショー」はコロナ禍で中止となり、今年は開催できるかどうかを気にかけてながら準備をしていました。

昨年の文化祭では、約半数の部会が中止になったので、ことしこそは感染対策を十分に言い実施するとうう気持ちで、文化祭関係者全員が待ち望んだ開幕式でした。

今回は、開幕式前にもご来場者を楽しんでいただけるよう、サクソフオン演奏によるウエルカムロビーコンサートを開催しました。開幕式は、佐藤信鹿沼市長及び、鈴木貢会長から主催者あいさつがありました。

続いて、多くの来賓の皆様を代表して、大島久幸議長、松井正一県議会議員、木村剛考商工会議所会頭にご祝辞をいただきました。

事務局 福田由子

第44回鹿沼市民文化祭開幕式報告— 鹿沼市民文化協会第12回文化セミナー 「藤石波矢トークショー」

今注目の作家です。鹿沼市の「かぬまふるさと大使」にも任命されました。

当日は司会者とのトーク方式で、作品に寄せる思いや作品をどの様に書いていくかなど、興味のある内容をテンポよくお話ししていただきました。



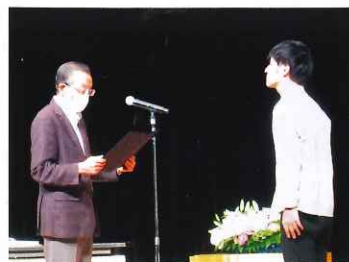
藤石波矢トークショー



鈴木貢会長より花束贈呈



サイン会



「かぬまふるさと大使」委嘱状交付

かぬま文化

つくるう 伸ばそう 鹿沼の文化

No.173

発行人 鹿沼市文化協会
発行責任者 会長 鈴木 貢
編集委員会 委員長 黒川 榮三
印刷所 晃南印刷(株)

第44回鹿沼市民文化祭開幕式報告	1
お知らせ	3
鹿沼詩友会	3
第76回栃木県芸術祭「多彩な芸術文化で受賞」編集後記	4

「かぬまふるさと大使」委嘱状交付	4
サイン会	4
ロビーコンサート	4

もみ 初俳句会の吟行

初俳句会会長 小保方 京司

私が二代目広瀬翔氏から受け継いで十一年になる。会に入っている方は、高齢な方が多く病院で認知が入っていると言われた。こんな調子で、一人が辞めると私もというふうになるが、がんばって会を続けていく。

最近では、会の皆さんと栃木の太平山や渡良瀬遊水地へ吟行し、楽しいひとときを過ごした。身体を動かして、自分の目で見るのが重要だ。百聞は一見にしかず。
とにかく句会の吟行は季語のありそうな所に行く。例えば彼岸花が咲いたと言え、そこへ。彼岸花が中心かというと、そうでもない。

鈴懸短歌会を振り返る

鈴懸短歌会会長 津吹 節子

月例の短歌会を行って、令和4年11月で七百六十五回となる。長い歴史のある鈴懸

短歌会を引き継いで十数年になる。これを機に鈴懸会の歩みを振り返ってみよう。資料によると最初に結成されたのは、なんと上野病院の入院患者さんたちの『都賀の友』というサークルに活動があった。その中の一つに短歌愛好者たち何人かが「江連白潮先生」を講師に数人で歌会を開いたのが始まりだったと伺っている。
会場は、各会員の自宅を回り番にしていた。一番多かった会場は、「互敬舎」という元の帝国製麻の一角にあったらしいと人伝に聞いた。
昭和33年8月2日(土)の日付がある歌会の印刷物が残されていた。今では私の知らない先人たちの歌であるがその日の作品を幾つか紹介しよう。
○暮れ沈むこの川面に
ひかりつつ白く流る
るマーガレットの花
橋田ヒサ子
○気になることひとつ
に執し雨の街を横切る
時に不意に怒鳴ら



江連白潮先生のご自宅前にて(2001.9)

る 村木 ミツ
○人を信じがたきこの
日々手にからむ糸も
もの憂ししろきレー
ス編む 大草美智子
○夜半に覚めて夢のつ
づきを想うとき病室
遠く咳く聞ゆ
山登 朝子
○テレビにて後立山の
雪溪をのぼりゆくひ
とりひとりがつさ
る 江連 白潮
このような作品を持ち
寄り、歌会が行われて
いる中でこの会の名
称を付けることになっ
たのだと思う。そして
いろいろ候補が上った。
「緑野・若草・鹿歌・
鈴懸・土曜会・晃南会・
山百合会・四つ葉の集
ひ」の中より『鈴懸会』
と決まったらしい。い
つも歌会を行う互敬舎
の傍には大きな鈴懸の
木が立っていたとも聞
いた。永永と続けて来
た鈴懸会ではあるが、
ご多分にもれず高齢と
なり少人数となったが
現在も意欲あるメン
バーで活動している。

かぬま川柳大会と川柳会の今後

かぬま川柳会 事務局 岩本 京子

会計 渡辺 桔梗

第44回市民文化祭が開催される中、かぬま川柳会は10月16日、多目的ギャラリーに於いて、第21回かぬま川柳大会を開催しました。



かぬま川柳会 松本とまと会長

お知らせ

第5回いちごいちえ鹿沼川柳大会

第1部大会

(日時) 令和5年2月12日(日) 午前9時30分～午後4時
(会場) 鹿沼市民文化センター多目的ギャラリ

第2部全国誌上大会

(課題) 「杉」二句詠
(投句受付期間) 令和5年1月20日(金)(消印有効)
(投句先) 〒322-0069 栃木県鹿沼市坂田山2丁目170番地
鹿沼市文化センター内
鹿沼市文化協会「いちごいちえ鹿沼川柳大会」係

◆問い合わせ先

「かぬま川柳会」 松本とまと ☎0289-62-5700
FAX 0289-62-5797



かぬま川柳大会 会場

コロナ禍の中、県内各地より川柳を愛する方々51名の参加をいただきました。今回の課題は「舞台」「追憶」「償う」「軽快」「痛感」「まあまあ」「利益」「明日」の合計8つです。各人が17音の世界を見事に表現し、有意義な大会となりました。なお会員は大会に向けてさまざまな準備及び当日の運営と大変なこともありましたが、会員の協力のもと披露、成績発表、賞品贈呈、そして会場の後片付けとスムーズに事が運んで無事に終了しました。

かぬま川柳会は、月一回情報センターにて雑談を楽しみながら句会を行い、そして別の川柳会への交流など脳トレを兼ねて5・7・5に日々励んでおります。なお当会も、若い方の入会が無く、高齢化

が進んでいる上、会員の減少が悩みとなっています。新規会員を随時募集しておりますので、一度句会を覗いて

みてください。そして御一緒に。
「脳トレへ今日も川柳575」

『一行の詩』を懐に 吟行する

鹿沼詩友会会長 篠原 久之

をやめないだろう 一行の詩があればぼくは生きられる」

(小林守城講師)
『一行の詩』がどのようなものかはわかりませんが、それはきつと私達の背骨、人生感そのものでしょう。私は一行の詩がどのような育っているか、時々懐から取り出してはほくそ笑んでいます。詩友会の皆さんの一行の詩が、豊かなものとなるよう期待します。

定例会は8月と年末年始を除き月一回、日曜日の午後に「まちなか交流プラザ」で行っています。またミニコミ誌「ASAだより」に毎月詩を掲載させていただいております。会員にはすでに高い評価を受けている方が多くいます。各自が他同人誌や地元新聞への投稿など、詩友会という枠をはみ出して力強く展開しています。

市文化祭は年々新たな応募者が増え、特に子どもの詩は、4年度

『ぼくは裸木になり青ざめて校庭に佇むことになったとしても見たことを見たと思えるために 一人佇むこと



第76回栃木県芸術祭

「多彩な芸術文化で受賞」

鹿沼市文化協会会長 鈴木 貢

今年は、7月から11月にかけて、4部門24分野にわたって、文化芸術作品等の募集やホール公演等の開催がされています。そして、優秀な成績を収めた方を顕彰する場として、表彰式を実施します。

県芸術祭は、芸術文化活動を行っている方にとって、貴重な発表の場であり、作者間の交流や顕彰をすすめる

ところです。県民のみなさんが主体的に文化活動に取り組みことを推進すると共に、芸術祭を鑑賞し、芸術を身近に触れることを提供しています。

主催は、栃木県文化協会、栃木県です。文芸部門（創作、随筆、詩、短歌、俳句、川柳）美術部門（日本画、洋画、彫刻、工芸、書道、写真）ホール部門（邦楽、吟詠剣詩舞、謡曲、音楽、演劇、バレエ、日本舞踊、

民謡・民舞）茶華道部門（茶華道展）文芸部門は、入賞作品が「文芸栃木」に掲載され、美術部門は、審査の結果、入選した作品の展覧会を行います。民謡・民舞の決勝戦は、11月23日、「真岡市生涯学習館にのみや」とちおとめホールで開催予定。各部門の「文芸賞」「芸術祭賞」をはじめとする各受賞者の表彰及び感謝状の贈呈は12月8日、栃木県公館で行われます。

第76回栃木県芸術祭にて「文芸賞」「芸術祭賞」「入選」された鹿沼市民の方々

（令和4年10月31日現在）（敬称略）

文芸部門

創作 U25賞（25歳以下）

上吉原 美里

随筆 文芸奨励賞

鈴木 貢

詩 文芸奨励賞

荻屋 紀子

短歌 文芸奨励賞

高村 光夫

川柳 文芸賞

白石 洋

美術部門

日本画入選

廣田 伸子

前田 美代

洋画 準芸術祭賞

菅谷 民子

工芸 芸術祭奨励賞

六角 春香

書道 芸術祭奨励賞

和賀 幸恵

入選 渡邊 司寶

伊藤 貴啓

藤沼 亜衣

板橋 寿鶴

齋藤 超

須永 茜潮

中村 礼子

写真 入選

福田 信夫

福田 貢

秋本 悦男

堂前 勝雄

編集後記

勢いを極め、規制の多かった新型コロナも、政府の規制が緩和され、感染防止対策を取って皆が何とか活動できるようになりました。そのような中で、2年間中止になっていた開幕式が実施でき、来賓の方々の挨拶や「藤石波矢トークショー」を盛況のうちに終えることができました。本当によかったと思います。

栃木県芸術祭文芸部門川柳で白石洋氏が「文芸賞」をまた、鈴木貢文化協会会長が、随筆で「文芸奨励賞」を、その他多くの方が各部門で受賞されました。誠にめでとうございます。

今号は、文芸部門の方々の記事と、前述の記事を載せることができ、うれしい限りです。規制が緩和されたことで、各部門でも活動を始められていると思います。活動がないとつい真剣味に欠けてしまいます。やらなくてはと思うと、緊迫感をもって活動します。そうすれば一人ひとりが向上し、それが文化の発展につながると思います。

また、私ごとですが、突然絶望的な不幸に襲われました。悲しみは深く、気持ちはどん底。どうして気持ちを晴らそうか。その気持ちを和らげてくれたのが、趣味だったのです。気持ちを暴露したり、悲しみを紛らわせてくれたり、私にとって、何とか立ち上がる気持ちを支えてくれたものだったのです。

趣味は、人生を豊かにし、仲間をつくり、自分を高め、楽しみを深め、時に悲しみも薄めてくれます。

まだまだコロナ禍は収まっていらない現状ですが、一人ひとりが自分の趣味に向き合い、真剣に活動すれば、自分が向上し、積み重なって、鹿沼市の文化の向上、そして、鹿沼市文化協会の発展となります。

今後とも頑張っていきたいと思います。

（大貫 宗正）



《編集委員会》
黒川 榮三
板橋 和子
寺崎 昌子
小林 夏江
斎藤 千恵子
大貫 宗正